

Project	地域協働専攻 国際協働グループ
01	The English Newsletter Project

メンバー	[学 生] 任 育成 / 鍵谷 姫歌 / 石神 真博 [担当教員] Andre Parsons
------	--

**【背景】**

私たちメンバーの中には、英語は好きであるものの4技能(Reading, Writing, Listening, Speaking)のどれかに不安を抱えているメンバーもいる。そこで、このプロジェクトでは、そんな不安を抱える人やむしろ苦手意識を持つ人にも、日常生活に取り入れることができる楽しい英語学習について考えた。

**【目的】**

前期は「楽しい英語学習」をテーマに SAS Express というニュースレターを作成し、大学生に効果的で楽しい英語学習を知ってもらおう。後期は「実用的な英語学習」をテーマに、参加者に楽しく英語に関する知識を知ってもらうため、日常生活において実際に困ったことを中心に、アクティビティを通して解決する。

**【概要】**

前期はお気に入りの映画紹介や早口言葉といった日常生活の娯楽と結びつけることのできる英語学習法や、検定や教材などの実際に役に立つ情報を提供し、大学生に効果的で楽しい英語学習を知ってもらうことを目的としたニュースレターを作成した。後期は事前にどのようなシチュエーションでの英語が求められているのかについてアンケートをした結果、「アルバイトで、外国人観光客が来店した際に困った経験がある。」また、「外国人の先生に対して、授業に関する質問や欠席連絡をするメールの書き方がわからない。」という声が多かったので、レストランでの接客とメールの書き方を2回に分けて英語学習アクティビティを行った。

**【プロセスと成果】**

①プロセス

次ページの年間スケジュールの通りである。

②成果

(1) ニュースレター

- ・読み手に伝わりやすいレイアウトや構成を考えることができた。
- ・日本語と英語で文章を書くことで、英語力の向上につながった。
- ・自分たちの英語学習についても見直すことができた。



ニュースレターのQRコード



(2) アクティビティ

- ・事前にとったアンケートを参考にして学生が希望する内容のアクティビティを実施した。
- ・レストランでの英語表現や英語のメールの書き方について学ぶことができた。
- ・アクティビティを行うことで、人前で話す能力が鍛えられた。
- ・学生にとって身近な話題の例文を使いながら説明することができた。



アクティビティの様子

**【総括と反省・今後の課題】**

①総括・反省

- ・情報を集めて分析する能力を身につけた。
- ・参加者同士の交流に焦点を置き、英語を使う頻度を増やししながらアクティビティを実施し、参加者から高い評価を頂けた。
- ・これまで、「誰かの役に立つような冊子づくり」や「学びが深まるアクティビティ」をしようと考えすぎていたが、その気持ちだけでは人は来ないことが分かった。
- ・英語に対し、苦手意識を持つ人も少なくないため、そのような人たちにも参加してもらうためには、楽しんでもらうためには、ということ意識して活動することができた。
- ・前期の計画を立てる際、メンバー間での日程がなかなか合わせるのが難しく、活動を進めるのが遅くなるがあった。
- ・アクティビティを計画しても参加者がいなくては成り立たないので、大学内の情報共有システム上だけで声をかけるのではなく、参加者をより効率的に集める方法を模索すればよかった。

②今後の課題

- ・引き続き英語を勉強するのはもちろんだが、次年度以降の地域プロジェクトのために、注意すべき点や工夫した点などをまとめること。
- ・具体的に、SNSを利用するなどしてより身近に感じられる宣伝を複数回に渡ってすることや友人らを通して、広く自分たちの活動を知ってもらえるような紹介をすること。
- ・事前に計画を立てることは重要だが計画通りに行かない場合もあるので、柔軟な対応をする必要があることや、後で忘れないように日時は可能な限り直近で設定する方が効率的であるということ。

**【地域からの評価】**

(ニュースレターの読者)

- ・ニュースレターが日本語と英語どちらでも書かれており、とても興味を引く内容で素晴らしかった。このニュースレターをもっと多くの人に広めるために、今後SNSなどを活用して情報発信できると良いと思った。

(アクティビティの参加者)

- ・新しい表現の仕方を教えてくれるたびに、練習させてくれたので頭に入りやすかったし、楽しく参加できた。また、表現をいくつも書いてくれていたので、自分の言いやすい表現を探せて面白かったです。
- ・自分が思っていたより正しいメールの仕方を知らないことに気付きました。今回のアクティビティを今後の欠席連絡をする際に役立てていきたいと思えます。

(一般的な評価)

- ・これからの時代は英語が必須になりつつあると思います。そういった、実践的な学習を大学のうちに学ぶことのできる環境を作ることや、英語が苦手な学生に対しての配慮を感じられた。そういった点で素晴らしいプロジェクトであると思った。

**【年間スケジュール】**


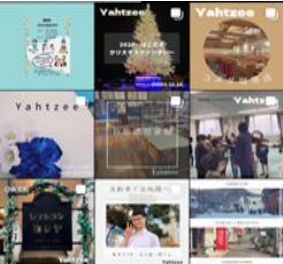
■前期

- 4月18日  
地域プロジェクト初回(自己紹介など)
- 5月 2日・ 5月 9日  
ニュースレターの内容についての話し合い
- 5月14日～7月25日  
情報収集、ニュースレターの作成
- 5月19日  
英語教材に関するアンケート作成・シェア
- 5月30日  
オンライン英語アクティビティ1に参加
- 7月 4日  
オンライン英語アクティビティ2に参加

■後期

- 10月18日  
テーマ決め
- 10月25日  
アクティビティ1の内容決め、広告作成
- 11月 1日～15日  
アクティビティ1の準備、最終確認、リハーサル
- 11月22日  
アクティビティ1の実施
- 11月29日  
アクティビティ2の内容決め、広告作成
- 12月13日  
アクティビティ2の準備、最終確認、リハーサル
- 12月20日  
アクティビティ2の実施



Project	地域協働専攻 国際協働グループ
02	函館・西部地区における多世代交流プロジェクト
メンバー	[学 生] 鈴木 聖 / 澤田 藍 / 馬場 鈴央 / 軽部 遥 / 佐藤 彩月 / 竹田 愛菜 / 今井 裕華 / 堀籠 真友 / 森 くるみ / 城戸 桃子 [担当教員] 有井 晴香
【背景】	<p>全国的に空き家の増加率が問題となっている中、函館市内においても高齢化や空き家率の増加が問題となっている。特に、西部地区では高齢化と空き家増加率の両方において最も高まっていることから、地域プロジェクトの活動を通じて、西部地区を活性化できないかと考えた。</p> <p>【目的】          地域プロジェクトの活動を通じて、西部地区における高齢化や人口減少といった問題から生じるコミュニティの縮小を抑え、西部地区に住む人々の人間関係を広げることに貢献する。</p> <p>【概要】          前期・後期を通して、「弁天班」と「谷地頭班」に分かれて活動を行った。「弁天班」は、主にスマイルクラブの開催と弥生小学校での学習支援を行った。「谷地頭班」は、主に谷地頭町の街歩きを通して、インスタグラムで街の魅力の発信を行い、別途スマイルクラブを開催した。</p>
【プロセスと成果】	<p>○弁天班          前期は、子どもたちが年齢を問わず交流の幅を広げる機会を作ることを目的とし、スマイルクラブを2回運営した。成果として、子どもたちの高い満足度を得ることができた。しかし、参加者がお互い顔見知りということもあり、他学年の友人や知り合いを新しく作るきっかけとなるには十分ではなかった。また、子どもたちと仲を深めるために弥生小学校での学習支援の活動を開始した。</p> <p>後期は、弁天班は前期に引き続きスマイルクラブの運営と弥生小学校での学習支援による小学生との交流を行った。弥生小学校での学習支援を継続したことにより、小学生との交流が深まり、スマイルクラブの実施をより広く周知することができた。その成果として、第3回スマイルクラブでは最も多い参加数を記録することができ、運営に関して多くの意見を集めることができた。しかし、第4回スマイルクラブでは、期待していた参加数を大きく下回ったことから、開催時期の検討が課題であると分かった。</p> <p>○谷地頭班          前期は、人口が減少している西部地区を活性化させるために、西部地区の魅力を多くの人に発信しようと考えた。具体的には、インスタグラムを用いて、谷地頭についての魅力、イベントの情報などを発信した。より多くの人に谷地頭町に興味を持ってもらうため、直接地域の人への取材を行い、インスタグラムの投稿に工夫を凝らした。多くの人に投稿を見てもらえたが、高いクオリティの投稿を安定して続けることが出来なかったという課題が残った。</p> <p>後期は、地域の活性化には多世代交流が必要になると考え、子どもから高齢者まで様々な人が集まり、楽しむことができるイベントを計画した。新型コロナウイルス感染症の流行があったため、イベントは子どものみ対象となったが、谷地頭町児童館で「スマイルクラブ」を開催することが出来た。カードゲームやクイズ大会を通し、子ども同士の交流、大学生と地域の子どもの交流の場を作り、スマイルクラブは成功に終わった。しかし、イベントの対象は子どものみとなってしまったため、多世代交流を図ることは出来なかった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>弁天班【第4回スマイルクラブの様子】</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>谷地頭班【インスタグラムの投稿】</p> </div> </div>



### 【総括と反省・今後の課題】

#### ○弁天班

前期は、スマイルクラブの企画・運営を通してイベントの構成や子どもたちの遊びの好みを知ることができた。大学生との交流においても、打ち解けるまでに時間は要さずスムーズに交流することができた。弥生小学校での学習支援においても、学校生活を観察・交流できたことでイベントの企画・宣伝に役立てることができた。

後期は、前期のスマイルクラブの活動を活かし、より子どもたちの意向に沿った活動内容を組み立てることができた。また、弥生小学校における小学生との交流から、スマイルクラブの周知を広く行うことができた。スマイルクラブの活動時には他学年の友達同士で助け合う姿も見られた。前期の活動と比較してスマイルクラブの企画・運営をスムーズに出来たことに加え、西部地区の小学生とより深い交流ができたが、最後に行った第4回スマイルクラブでは、小学生が冬休み期間中であったため、冬休み前のみの告知となってしまう、スマイルクラブの開催を印象付けることができなかった。そのため、参加者が減少してしまい、期待通りの活動を行うことが出来なかった。活動を通して、目的である西部地区に住む人々のコミュニティを広げるための機会を作ることができているように感じ、継続的なイベントの運営と弥生小学校での活動によってプロジェクトをさらに効果的なものにする事ができた。

今後の課題として、イベント開催に向けた事前調査により力を入れることや宣伝活動の工夫が挙げられる。これらによって、子どものみならず多世代が交流する場を作ることができるのではないかと考えるとともに、イベントの開催を印象付けることにもつながると考える。

#### ○谷地頭班

前期は、谷地頭に実際に足を運び、谷地頭の人々と交流して谷地頭について知っていく中で、谷地頭の魅力、谷地頭の方々の温かさに触れることができた。インスタグラムを開設し、アカウント作成から企画、取材など一から投稿の作成、運営を行い、前期中はインスタグラムで週2回ずつ計19回の投稿を作成した。多くの人に投稿を見てもらえたが、投稿を見た人が実際に谷地頭を訪れたのかわからず、インスタグラムの活用方法が今後の課題となった。

後期は、弁天町と協力してスマイルクラブの開催を1度行い、その宣伝、報告をインスタグラムで行うことができた。また、インスタグラムの投稿を週1回に頻度を下げ、投稿のクオリティを上げることに重きを置いた。インスタグラムの運営と同時並行で谷地頭町児童館において小学生と交流するイベントの企画、準備を進め、開催した。活動を通して、地域の人たちと交流する機会は、地域を活性化させるうえで重要なものだと感じた。インスタグラムの運営だけでなく、イベント開催によりプロジェクトをより充実させることができた。

今後の課題として、多くの人にインスタグラムの投稿をみてもらうための投稿の工夫や、多世代がより活発に交流することができる機会を増やすためにどのようなイベントが効果的であるかを考える必要がある。

### 【地域からの評価】

○弁天班：スマイルクラブや学習支援の活動を通して、スマイルクラブの継続を希望する声をもらった。また、保護者の方からは、子ども同士の交流の場に加え保護者同士の交流の場も少ないため、保護者も交流できる場があればありがたいという声もいただいた。一方で、高齢者の方からは子どもとの交流の機会は嬉しいが、子どもたちに迷惑をかけてしまう可能性を心配するという声もあり、消極的な意見をいただいた。

○谷地頭班：地域の方に取材を行った際に、大学生が活発に地域の活性化に携わろうとしてくれて嬉しいという声をいただいた。インスタグラムでの発信やスマイルクラブでの交流については、谷地頭町の魅力を多くの人に発信してくれたり、子どもたちの憩いの場を作ってくれたりして本当にありがたいという声もいただいた。また、高齢化率の高い地域での活性化を実現させるためには、大学生をはじめとした若者のより活発な力によって、地域がもっと素敵な場所になるのではないかとのご意見もいただいた。

### 【年間スケジュール】 ※SC=スマイルクラブ

#### ■前期

- 5月 「谷地頭散策」  
弁天:第1回SC計画  
谷地頭:まちづくりワークショップ
- 6月 「中間発表準備」  
弁天:第1回SC準備・運営・反省  
谷地頭:Instagram開始・取材
- 7月 弁天:第2回SC計画・準備・運営

#### ■後期

- 10月 「後期活動計画」  
弁天:弁天町散策
- 11月 「第3回SC準備・開催・反省」
- 12月 弁天:第4回SC準備  
谷地頭:谷地頭児童館訪問
- 1月 「成果発表会準備」  
弁天:第4回SC開催  
谷地頭:谷地頭SC開催



Project	地域協働専攻 国際協働グループ
03	函館ジャーナリズム

メンバー	[学 生] 伊藤 夕貴 / 北山 創一朗 / 佐川 優花 / 佐々木 樹 / 坪田 岳穂 / 横山 智丈 [担当教員] 飯山 雅史
------	---

**【背景】**

函館を中心とした道南地域の魅力的な話題を掘り起こし、記事にまとめ、ブログサイトに投稿しようと考えた。

**【目的】**

社会で活躍する大人に話を聞くという「取材する」能力、取材した内容を基に、記事を作成するという「ものを書く」能力を養うため。

**【概要】**

道南地域の話題についてメンバーが持ち寄り、話題性、公共性などの観点から、どの話題を取り上げるのかを吟味。テーマ決定後取材先を決め、取材交渉を行い、取材。事実が伝わりやすいよう記事を作成、教員やメンバーによるアドバイスを基に手直しを行う。その後ブログサイト上に記事をアップロードした。

**【プロセスと成果】**

前期の活動では、まず取材の仕方、記事の書き方について学んだ。取材に関しては、取材交渉の際に気を付けなければならないこと、取材に行き話を聞く際にどのような点に注意すべきか、意識すべきかについて学び、記事の作成に関しては、事実をそのまま伝えるということと、読み手が読みたいと思う、伝わりやすい文章にするにはどのような点を意識すべきかについて学んだ。

また、北海道新聞社の記者の方にお越しいただき、実際の現場ではどのように取材を行い、記事を作成しているのかについてご教授いただいた。

5月からは3人1組の2グループに分かれて取材を行った。各チームが2つの取材先へ取材を行い、記事を作成、その後研究室に集まり、記事の読み合わせを行った。記事の読み合わせでは、メンバー1人1人が記事についての意見を述べ、それについて考察を行い、記事の手直しを行った。また、飯山先生の指導によって、新聞記事に近い文章を作成することができた。

その後、班を決め直し、初回の記事とは違ったメンバーで取材、記事の作成を行った。1本目の記事での反省を生かし、より完成度の高い記事を読み合わせの際に持ち寄ることができた。

後期の活動では、開始するにあたって公共性も意識しつつ、以前よりも個人の興味のあるテーマ選択をするということを決めた。また、班員を1グループ2名に減らすことによって、1人当たりの仕事量が増え、全員が活発な活動を行うようになった。これにより、11月中に合計3本の記事を完成させることができた。

この時点で記事の書き方に対する指摘は減り、ジャーナリズム的文章を書くことに慣れることができた。しかし、12月に取り組んだ最終記事では、3本中2本が予定通りに取材、記事作成が進まないということがあった。予定していた取材先に取材を断られてしまったことや、情報共有のミスが原因であった。その中でも、できる限りの情報から記事を作成することはできたため、取材が計画通りにいかない時の対処法というものを学ぶことができた。

本プロジェクト最終回では、作成した全ての記事を冊子にまとめ、取材に応じていただいた団体へ郵送した。



製本作業をしている様子



完成した冊子

### 【総括と反省・今後の課題】

前期は、記事を作成するとはどのようなことなのかということを学ぶ期間であった。座学を実践するという段階まで行うことができた。人に伝わりやすい、読んでもらうことができる文章とはどのような記事かを全員が意識してプロジェクトに取り組んでいた。

後期は、前期で学び、実践したことの完成度を高める、継続するという期間であった。記事の読み合わせごとに学んだことを活かして、まず校閲を行う、その次に他人に見てもらおうという流れができていたように感じる。より完成度の高い記事が読み合わせの時点でできていたということは成長を感じた。1班当たりの人数を減らしたにも関わらず完成度が上がっていたことが、個人の力がついたことを実感させた。

今後の課題としては、テーマ選択の際に、より新しいことを選び、記事に話題性を持たせることが必要であり、記事を完成させ発信するまでの時間を短縮することが必要だ。そのためには、作業スピードの向上、道南地域の話題について常に探索することが必要であろう。

### 【地域からの評価】

取材先の方々からは「是非地域の活性化のためにこの取り組みを知ってほしい」などという声があがった。本プロジェクトでは非営利組織やイベントへの取材も行ったため、各団体の取り組みやイベントをこれからも継続し、規模を拡大するために、ぜひ協力して欲しいという声が多かった。今後もこのような地域と大学を繋ぐ活動を行うことで若者の力を活かしたい、若者と協力していきたいという意見もあった。

また、作成した冊子についてお礼のメールをいただくこともあった。

### 【年間スケジュール】

#### ■前期

- 4月14日 第1回 「顔合わせ、プロジェクトについて」
- 4月21日 第2回 「記事の書き方について」
- 5月12日 第3回 「テーマ選択」
- 5月19日 第4回 「現役新聞記者による書き方講座」
- 6月 9日 第5回 「記事読み合わせ」
- 6月16日 第6回 「テーマ選択」
- 7月 9日 第7回 「取材中間ミーティング」
- 7月29日 第8回 「記事読み合わせ、前期振り返り」

#### ■後期

- 10月 6日 第1回 「後期活動計画」
- 10月11日 第2回 「テーマ決定」
- 10月27日 第3回 「取材中間ミーティング」
- 11月10日 第4回 「記事読み合わせ、次回テーマの決定」
- 12月22日 第5回 「記事読み合わせ」
- 1月12日 第6回 「発表製本の計画、役割分担」
- 1月19日 第7回 「発表会のパワーポイント作成、製本」
- 1月26日 第8回 「冊子の郵送」





Project	地域協働専攻 国際協働グループ
04	やさしい日本語と外国語

メンバー	[学 生] 星野 隆秋 / 熊谷 百寧 / 福澤 真那 / 山岡 颯太 / 高橋 快斗 / 細川 泰希 / 鳥倉 靖世 / 高橋 美雨 / ホアン・ディン・クオック・クン [担当教員] 伊藤 美紀
------	---

### 【背景】

函館の各観光地には案内板が設置されているが、日本語と英語で表記されている場合が多く、専門用語や比較的難易度が高い語彙が使用されている。そのため、全ての人に分かりやすいとは言えない。また、外国人の中には、英語が母語でない人や、英語よりも「やさしい日本語」の方が理解しやすい人もいる。そこで、このプロジェクトでは、函館市内の観光案内板を「やさしい日本語」を用いて、外国人に伝えようと考えた。

### 【目的】

このプロジェクトでは、函館市内に設置されている観光案内板の「やさしい日本語」版の作成を行うことを目的とする。同時に、本プロジェクトメンバーが難解な日本語を書き換える活動を通し、やさしい日本語への理解を深めること、やさしい日本語ユーザーに必要な教育マインド、複言語主義をはじめとした言語政策に対する知識を身につけることを目的としている。

### 【概要】

このプロジェクトでは、まず、文献講読を通して「やさしい日本語」への基礎知識について学んだ。その後、函館市内に設置されている観光案内板のやさしい日本語版の作成や作成基準について検討した。書き換えた12件の案内板のやさしい日本語版は、来年度以降の公開を目指している。

### 【プロセスと成果】

前期は、庵功雄(2016)『やさしい日本語—多文化共生社会へ』の内容を要約し、各メンバーが行った章ごとの発表を通してやさしい日本語に対する理解を深めた。また、はこだて未来大学の奥野拓先生から、やさしい日本語に書き換え終えたものに振り仮名や注釈をつけた状態を事前確認するための、プレビューシステムの使い方を学んだ。

後期は、やさしい日本語で観光案内板を書き換えるため、書き換え基準を作成した(図1)。作成する上で、同じくやさしい日本語で書き換え作業を行っていた高橋圭介先生の地域プロジェクト(本書P22)のメンバーと注釈の統一や書き換えの案について具体的な意見交換を重ね、推敲していった。

さらに、後期は留学生と活動を共にした。活動の中で、書き換え基準は満たしているが、わかりにくいと感じる日本語の指摘を留学生から受けた。日本語を母語にする人が持つ考えに偏ったものではなく、留学生の意見を取り入れることができたことで、より実用的な書き換え案を作成できた。

ここで、本プロジェクトの成果として以下の4点を挙げる。

1. やさしい日本語に関する文献を講読し、やさしい日本語に関する知識や理解を深めることができた。
2. 実際にやさしい日本語への書き換えをしてみて、やさしい日本語への書き換え方、やさしい日本語の必要性、函館の歴史を学んだ。
3. 留学生との書き換え活動を通して、定められている語彙の基準を再検討した。
4. はこだて未来大学の先生や学生との交流を通じて、自分たちが学んだ事を発信する方法の一部を知ることができた。

書き換えが難しい2級以上の語彙があるときは注釈。
外来語はあまり使わない。
語彙は日本語能力試験出題基準語彙表の3, 4級から使う。ただし、2級以上の語が出た場合は「みんなの日本語」初級I・IIの語彙を参考にする。
擬音語、擬態語は避ける
固有名詞は注釈で説明し、「人の名前」「場所の名前」などと分かるようにする ※観光案内板に深く関わるものは詳しく
人名の注釈には役職名を書く。役職名が難しければ、その後ろに ( ) を付け、その中に説明を書く。ただし、人名の後にその人に対する説明が書いてある場合は注釈を省く。カタカナの固有名詞は注釈にて英語または原語で名前を書く。「人の名前」と書いた後に。
情報量は減らさない。
使用する全ての漢字にふりがなを振る

図1 書き換え基準(一部抜粋)

**【総括と反省・今後の課題】**

本プロジェクトでは、難解な日本語を書き換える活動を通し、やさしい日本語への理解を深めることを目指した。また、函館市内に設置されている観光案内板のやさしい日本語版の作成を行った。学びの成果と課題をまとめた。前期は、文献講読を通して、「やさしい日本語」についての基礎知識を学んだ。「やさしい日本語を用いることは、外国人の『居場所』を作る手助けとなる」「情報を正確に伝えることはコミュニケーションの重要な一部である」といったことを学んだ。

後期は、計12件の書き換えや基準の整理を通して、「日本語母語話者」にととの「やさしい日本語」と「日本語学習者」にととの「やさしい日本語」は異なるため、やさしい日本語の書き換え方、やさしい日本語の必要性を知った。

今後も、「安らかに眠る」など複数の語彙からなる句表現や詩などの文学的な文章の書き換えについて、引き続き検討する必要があると考える。

参考文献：庵功雄(2016)『やさしい日本語—多文化共生社会へ—』岩波新書 p.1-168

南北朝の文化財 (やさしい日本語)



図2 書き換えたやさしい日本語の一例

**【地域からの評価】**

連携先である公立はこだて未来大学の奥野拓先生から以下のようなコメントをいただいた。

「一年間の活動おつかれさまでした。

コロナ禍も落ち着きつつあり、日本を訪れる外国人旅行者や留学生が再び増加傾向にあります。そのような状況では、やさしい日本語の取り組みは益々重要になっていきます。

特に、観光客に文化財を解説するために設置された観光案内板をやさしい日本語に書き換える取り組みは、日本有数の歴史観光都市である函館にとって重要な意味を持つ有意義な活動と言えます。

成果発表会での説明から、文化財の解説文には、基準に沿った書き換えが難しい概念が含まれていたり、文学作品が挿入されていたりと、非常に困難な取り組みであることがわかりました。

そのような、「正解がない問題」に取り組んだ経験は、きっとみなさんの将来に役立つことと思います。

今後もこのプロジェクトが継続し、みなさんやみなさんの先輩方が書き換えた説明文が「やさしい日本語版『南北朝の文化財』」で公開され、函館を訪れる外国人に活用されるようになることを期待しています。」

また、未来大4年生の田島さんにはやさしい日本語版データをオンライン上に納品するためのシステムの利用方法について教えていただいた。

連携してくださった皆様に感謝申し上げます。

**【年間スケジュール】**

■前期

- 4月
  - ・前期のスケジュールリング
- 5月
  - ・やさしい日本語に関する文献講読とワークショップ
  - ・出入国在留管理庁ホームページ「やさしいにほんごガイドライン」のオンデマンド学習
- 6月
  - ・やさしい日本語に関する文献講読
- 7月
  - ・2022年7月1日国際地域研究シンポジウム(参加)
  - ・はこだて未来大学 奥野先生とのミーティング
  - ・中間発表準備、発表

■後期

- 10月
  - ・やさしい日本語に関する文献講読
  - ・書き換え作業
- 11月・12月
  - ・書き換え作業
- 1月
  - ・書き換え作業
  - ・成果発表準備、発表
  - ・はこだて未来大生による書き換えデータの納品方法についてのワークショップ
- 2月
  - ・やさしい日本語版データの指導教員への納品(12件)





Project	地域協働専攻 国際協働グループ
05	プロジェクトJ ～人類ジュウラニアン化計画～
メンバー	[学 生] 小田 玲音 / 桑重 伶衣 / 櫻井 日菜乃 / 又地 史也 / 渡邊 千紘 [担当教員] 小林 真二
<b>【背景】</b>	2022年に生誕120周年を迎える函館市出身の文豪、久生十蘭の評価を盛り上げることを目的にプロジェクトは始まったが、当初はWikipediaを書くものであった。しかし、学生は彼について全く知らず、また周りの人も知らない人が多いことから、検索しなければ見ないWikipediaでは目的を達成できないと考えた。そこで市内各地でさまざまな年代の人にとにかく彼の名を知ってもらうために周知活動を行うことにした。そして彼の魅力を発信する中で「ジュウラニアン」と呼ばれる十蘭の熱狂的なファンを増やすことを目的に設定した。
<b>【目的】</b>	久生十蘭の知名度向上 ジュウラニアンの増加
<b>【概要】</b>	POP…各々がおすすめの作品について手書きで作成し、各イベントで活用 簡易版リトファスゾイル…リトファスゾイル(円筒型広告塔)を簡易的に函館中部高校、函館蔦屋書店で再現 ポスター・チラシ…イベント周知のため人目を引き付けるものを作成 図書室だより…高校生への久生十蘭のPR、オススメ作品の紹介 ブックトーク…函館中部高校、函館蔦屋書店にておすすめ作品や久生十蘭の魅力を紹介 「読んで話す会」…「骨仏」を読み解釈の交流、ジュウラニアン化への直接的なアプローチ
<b>【プロセスと成果】</b>	<p>始まりはWikipedia執筆の地域プロジェクトであった。Wikipediaを書く準備をする中で、果たして知名度の低い久生十蘭のWikipediaを書くことが何か地域のためになるのかと考えた時に、もっとできることがあるのではないかと感じた。彼の作品に触れ、魅力に気づいたメンバーは彼をもっと知ってもらいたいと考え、そのための活動をしようと活動内容をシフトした。また、Wikipediaは検索しないと見ることがないという課題にも気づき、知名度向上が優先事項であると全員の考えがまとまった。</p> <p>前期は函館市中央図書館、Café TUTU、抹茶茶房にてPOPなどを配した十蘭コーナーを設置した一方で、五稜郭タワー株式会社専務の中野さんにリトファスゾイルについて話を聞きに行った。中央図書館では本好きの方や、勉強にきた学生などをターゲットにした結果、十蘭コーナーの本の大半が常に貸出中となった。カフェでは図書館よりも幅広い層をターゲットにし、その中には観光客も含まれるため、函館市民以外にも久生十蘭の名前を周知できた。中には本を購入したいという人もいた。</p> <p>後期は函館市文学館にて「生誕120周年記念 久生十蘭展」に参加し、POPの設置、講演会へのゲスト出演などを行った。函館の文学発信の場所である文学館にてこうしたイベントが行われ、それに参加できたことはその後の活動を活気づける大きなきっかけとなった。その後は十蘭の母校である函館中部高校にて十蘭コーナー設置、簡易版リトファスゾイルの設置、ブックトークを行い、今まであまり注目されていなかった十蘭が母校で広まるきっかけを作ることができた。図書室には十蘭の特大大パネル、玄関には柱を活用した簡易版リトファスゾイルを設置したことで通る人の目を惹くことができた。さらに、函館蔦屋書店にて十蘭特設コーナー、簡易版リトファスゾイルの設置、イベント開催を実現した。この活動には市立函館高校の生徒3名も函館学の授業の一環として参加し、メンバーが8人に増えた状態で行われた。高校生からも積極的に意見をもらい、より緻密な計画が練られたと感じる。十蘭コーナーでは入り口付近の本棚を借りてPOPや紹介文などで装飾したところ、通常は一年に数冊売れるかどうかといった十蘭の本が約2ヶ月の間で約30冊も売れるという成果が得られた。読書の森と呼ばれるスペースでは簡易版リトファスゾイルを設置し、イベントの告知と久生十蘭の紹介を果たした。イベントではブックトークと「読んで話す会」の二つを中心に進め、各々のおすすめ作品の紹介をしたり、久生十蘭の入門短篇である「骨仏」を読んで解釈を交流したりすることで、彼の作品の魅力について知ってもらった。</p>



函館市中央図書館に十蘭コーナーを特設



蔦屋書店イベントにてブックトークを行う高校生



中部高校に設置した簡易版リトファスゾイル

### 【総括と反省・今後の課題】

当初の活動内容であるWikipediaの執筆をただこなすのではなく、そこに対して疑念を持ち、本当に地域にとってプラスになることを考えて修正することができた。その中で個々人の思い切った行動力や積極性によって色々な場所で久生十蘭をPRできた。豊富なアイデアに溢れるがあまり、意見がまとまるまで時間を要し、計画を立てる前に行動が先走ってしまったことは反省点であると感じる。

久生十蘭を広めたいという熱い思いのもと1年間行動した中で、読書好きな一部の人のだけでなく、各所での周知活動や新聞を通じて十蘭の名前と魅力を広く様々な人に知ってもらえたと感じる。中でも市立函館高校の生徒や、毎回の取材で話した新聞記者の方には直接十蘭の魅力を発信する機会が多くあったため、結果的に彼ら自身をジュウラニアン化することができたことも成果である。また、蔦屋書店でのイベントでもジュウラニアンを増加させることができ、このプロジェクトの目的である「久生十蘭の知名度向上」及び「ジュウラニアンの増加」は大成功に終わったと言えることができる。

反省として挙げられるのは大学内での活動が少なかったことである。普段なかなかできない外での活動を重視したため、いつでもできそうな大学生や教職員を対象に活動することがなかった。そのため、大学生にはなかなか私たちの活動が知られていなかった。今後は大学内でも十蘭を知ってもらい、ジュウラニアン増加に向けて活動したいと思う。

### 【地域からの評価】

蔦屋書店でのイベントには幅広い年代の方々の参加があった。イベント後に実施したアンケートではジュウラニアン度(十蘭を知らないもしくは作品を読んだことがない状態を0とし、十蘭のファンになったという状態を10とする)に関するアンケートを取った結果、すべての方に上昇がみられ、平均3.57ポイントの上昇がみられた。また、自由記述のコメント欄には「段取りや進行がスムーズで楽しかった。」「若くて頑張っている姿に心打たれた。」など数々のお褒めの言葉をいただいたほか、「今後久生十蘭の作品を読みたい」など知名度や関心の向上にもつながった。

図書館での貸し出しの様子や、蔦屋書店にて例年の数十倍の売り上げがあったことから、地域に十蘭が広まり、関心を得られたことがわかる。

また、一年を通じて計11回もの新聞掲載(報道の記録・P88～89にも掲載)があったように、地域から長い間にわたって高い関心を抱いてもらえたことが窺える。

### 【謝辞】

市立函館高校の3名の生徒さんをはじめ、関係者の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

### 【年間スケジュール】

#### ■前期

- 4月 アイスブレイク
- 5月 久生十蘭の作品精読
- 6月 イベントや特設コーナーの内容決定
- 7月 中央図書館、カフェに置くポップの制作 SNSでの宣伝活動
- 8月 中央図書館特設コーナーの設置 カフェ2店舗でポップの設置
- 9月 文学館でのイベント、特設コーナーの設置

#### ■後期

- 10月 市立函館高校の生徒とのアイスブレイク ポップの制作
- 11月 中部高校での特設コーナーの設置 蔦屋書店でのイベント準備
- 12月 中部高校でのブックトークイベント 蔦屋書店でのブックトーク、「読んで話す会」イベント
- 1月 成果発表に向けての準備、発表実施 成果報告書の作成



Project	地域協働専攻 国際協働グループ
06	地域としての外国人労働者の受け入れ
メンバー	田村 瑠実愛 / 岡本 諒子 / 田中 里苑 / 藤原 裕子 / 管原 月美 / [学 生] 成田 智郁 / 鈴木 康平 / 阿部 夏澄 / 坂本 叶羽 / 金子 真夕 / 菊池 香好 / 水澤 妃奈乃 [担当教員] 孔 麗

### 【背景】

少子高齢化による労働力不足が問題となっている日本社会において、外国人労働者は欠かせない存在である。これは、日本のみならず他国にもみられる問題であり、現在、世界で労働力の奪い合いが起きている。また、外国人労働者の多国籍化もみられる。

そこで、地域プロジェクトの活動を通して、労働者だけではなく生活者としての外国人労働者の実態をよりよく理解したうえで日本が外国人労働者から「選ばれる国」になるための方策を考えるとともに、必要な支援活動を行うこととした。

### 【目的】

1年間の地域プロジェクトで、外国人労働者のなかでも未熟練労働者である「技能実習生」に着目し、座学研修や受入企業の講義を通して、現在の日本の労働者受入体制について理解を深める。さらに、彼らとの交流を通して、生活の様子や抱える問題、日本国に求めること等を明らかにしたうえで、日本が「選ばれる国」になるために必要な支援を学生の目線で考えることを目的とする。

### 【概要】

1年間の地域プロジェクトで、座学研修や講義、新規入国外国人技能実習生への日本文化の紹介と文化交流、函館市内の水産加工企業を訪問、外国人技能実習生が働く現場の見学を行った。帰国直前の技能実習生との意見交換から、現在の日本の外国人労働者の受入体制や技能実習生の生活の実態について理解を深めた。また、私たちにできる技能実習生への支援を考え、産学官民の連携による水産加工と自動車産業間の文化交流会を行い、異文化理解の重要性を地域に広める試みをした。

### 【プロセスと成果】

前期の活動では、4月に座学研修を行い、外国人技能実習制度の仕組みや在留資格である「特定技能1号・2号」創設の経緯と概要について学んだ。5月には森町で新規入国外国人技能実習生との異文化交流会を実施し、来日の動機や母国での事前研修の内容について話し合った(写真①②)。6月は外国人労働者受け入れに関する勉強会を実施し、日本の外国人受入れ体制についての理解を深めた。7月は帰国直前の技能実習生との意見交換会を実施し、技能実習生の生活実態の一端を把握できた(写真③④)。8月には外国人労働者に関わる映画上映会に参加し、日本の受入れ体制にちなんだ技能実習生を不法滞在へと追い込んでしまった問題などを学んだ。

後期の活動では、10月に紋別市による「外国人との多文化共生の実態と取組み」の講演会にオンラインで参加し、多文化共生の先進的取組みや外国人の就労支援などについて学んだ(写真⑤)。11月は本プロジェクトと函館市の共催による、産学官民の連携による異文化交流会を実施した。学生による日本の文化紹介を行ったり(写真⑥)、SNSを通じて折り紙で母国の家族へメッセージを送ったり(写真⑦⑧)、どら焼きを作って実食し(写真⑨)、浴衣で函館の名物であるいか踊りをする事で(写真⑩)親睦を深め、同じ地域に暮らす生活者として異文化理解を深めることができた。

12月は函館市内の水産加工企業を訪問し、技能実習生が働く現場の見学、スリランカ人の技能実習生との交流を通して技能実習生の労働環境や技能実習生の受入の現状を学んだ(写真⑪⑫)。



①プレゼンの様子(森町)



②鯉のぼりアート記念撮影



③技能実習生との意見交換



④白玉団子の作成





⑤紋別市による講演会



⑥日本文化の紹介



⑦折り紙で母国の家族へメッセージ



⑧SNSで母国の家族と情報共有



⑨どら焼きの作成&美食



⑩浴衣でいか踊り



⑪水産加工企業によるご講話



⑫スリランカ技能実習生との交流

### 【総括と反省・今後の課題】

座学研修や現場活動、技能実習生へのアンケート調査から、日本の外国人労働者の受入体制の現状について学んだ。技能実習生との交流会では、日本語でのコミュニケーションが難しいなどといった生活する上での問題を知ることが出来た。また、産学官民の連携による初の水産加工と自動車産業間の交流会やSNSを通じた母国家族との交流を行い、異文化理解を深めた。一方、多国化している技能実習生と彼らの労働環境をより理解することが必要である。今後、多文化共生の実現に向けて、技能実習生との交流の場や輪をさらに広げると同時に技能実習生へ向けた日本語学習支援について考えることが必要である。

今年度は異文化交流を通して、地域から多くの評価をいただいたため、次年度の本プロジェクトの学生は、それらを活かした活動を行ってみたい。

### 【地域からの評価】

- ◆はじめてベトナムの人と交流した。交流はとても楽しく良い経験になった。(市民)
- ◆ほかの企業や職種で働く技能実習生が交流する機会はありませんので、今回の取り組みは良い経験になったのではないかと。(企業)
- ◆みんなで作る料理はとても楽しく、またおいしかった。参加してよかった。(技能実習生)
- ◆外国人技能実習生との交流会を通じて、異文化の理解を肌で感じる事が出来た。(高校生)

### 【新聞記事】

令和4年5月5日に開催した「森町異文化交流会」の活動の様子は、①『函館新聞』(22.5.10)に、11月23日の「産官学民の連携による外国人技能実習生との異文化交流会」の様子は、②『函館新聞』(22.11.25)、③『読売新聞』(22.11.26)、④『北海道新聞』(22.12.2)に掲載された。(報道の記録・P90に一部掲載)

### 【謝辞】

本プロジェクト活動の実施に当たり、函館市、トナミ食品工業株式会社、函館日産自動車株式会社、JICA北海道センター、(一財)北海道国際交流センター、(一社)北海道中小企業家同友会函館支部、渡島国際交流事業協同組合、株式会社竹田食品、函館遺愛女子高等学校、外国人技能実習生の皆様、地域住民の皆様からご協力、ご支援をいただき、心より感謝を申し上げます。

### 【年間スケジュール】

#### 前期日程

- 【4月】
  - ・オリエンテーション
  - ・座学研修
    - ① 外国人技能実習制度の仕組み
    - ② 新在留資格「特定技能1号・2号」創設の経緯と概要
- 【5月】
  - ・コロナ後、新規入国外国人技能生との異文化交流会の企画
  - ・森町の新規入国外国人技能実習生との異文化交流会の実施・反省会
- 【6月】
  - ・「外国人労働者受入を問う」勉強会
  - ・発表会・検討会
- 【7月】
  - ・帰国直前の技能実習生との意見交換会の企画・準備・実施
  - ・中間発表会の準備・実施
- 【8月】
  - ・在日外国人家族とベトナム技能実習生を題材にした映画上映会の参加

#### 後期日程

- 【10月】
  - ・オリエンテーション
  - ・外国人労働者受入の先進的取り組み地域 - 紋別市の受入体制についての勉強会
  - ・紋別市「外国人との多文化共生の実態と取り組み」講演会の開催
  - ・討論会
- 【11月】
  - ・産官学民の連携による異文化交流会の企画
  - ・関連団体との連携準備・相談・広報
  - ・交流会開催のための勉強会・資料の作成
  - ・産官学民の連携による異文化交流会の実施
- 【12月】
  - ・産官学民の連携による異文化交流会実施後反省会
  - ・交流会の資料整理・課題の作成
  - ・道南地域の水産加工企業の外国人労働者受入の勉強会
  - ・外国人労働者を受け入れる水産加工企業の訪問と外国人労働者との交流
- 【1月】
  - ・企業訪問後の感想発表会
  - ・最終発表会の準備
  - ・最終発表会の実施





Project	地域協働専攻 国際協働グループ
07	外国にルーツを持つ児童・生徒への 日本語学習支援プロジェクト

メンバー	[学 生] 阿部 明歩 / 大橋 恵那 / 紅野 茜 / 中井 希 / 晴山 寧乃 / 吉田 藍 / 渡邊 隆太郎
	[担当教員] 佐藤 香織

**【背景】**

外国にルーツを持つ児童への日本語教育は、日本語教育の領域における大きな課題の1つであり、函館の小中学校には日本語支援を必要としている児童(生徒)がいる。今年度は新型コロナウイルス感染対策を徹底しながら支援を行った。

**【目的】**

児童(生徒)の日本語能力の向上を目指し、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況下でも行える日本語学習支援の教材づくりをすること。また、支援実施者の日本語教育の実践、地域の教育機関や日本語支援員との連携を図ること。

**【概要】**

新型コロナウイルス感染対策を徹底しつつ、実際に対面で日本語教育支援を行った。小学3年生の対象児童へは入り込み支援を行い、社会と算数の授業に参加した。アフガニスタンからの対象生徒へは前期は大学構内にて日本語学習支援を行い、後期からは中学校にて入り込み支援と取り出し支援を行った。入り込みでは、先生の指示や板書を簡単な日本語や英語に変換することで支援を行った。また、自宅で平仮名や日本語の復習ができるような教材を作った。取り出しでは児童(生徒)の苦手に合わせて教材づくりをした。

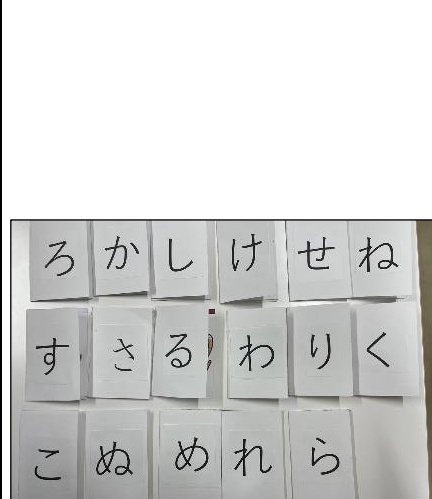
**【プロセスと成果】**

前期は、初めに日本語教育支援の実態を知るために、関連するシンポジウムの報告書を読み、それぞれ学んだことを共有し、基礎学習を行った。それと並行して4月から日本語支援を行った。支援内容としては、授業の入り込み支援の場合、読み書きの難しい漢字の補助、個人学習で困っていた時の補助、教師の指示の通訳、教科書の説明を通訳する、またはやさしい日本語に言い換える活動を行った。

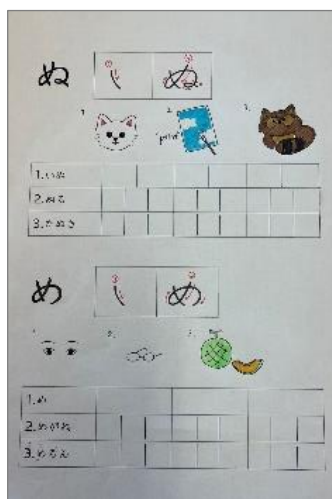
そのほかにも1年を通して、対象児童(生徒)の学習能力を考慮した教材づくりを行い、学校外でも日本語を楽しく学習してもらえるよう工夫した。

これらの活動の成果としては、対象児童(生徒)の精神的負荷を考慮した支援、対象児童(生徒)に楽しく日本語を学んでもらうための教材づくりを行うことができた点があげられる。教材づくりについては、対象児童(生徒)の好きなことや興味のあることを考えて教材にし、継続して日本語を学習してもらえるよう工夫して、実際に教材を使用して楽しく日本語を学習してもらえた。

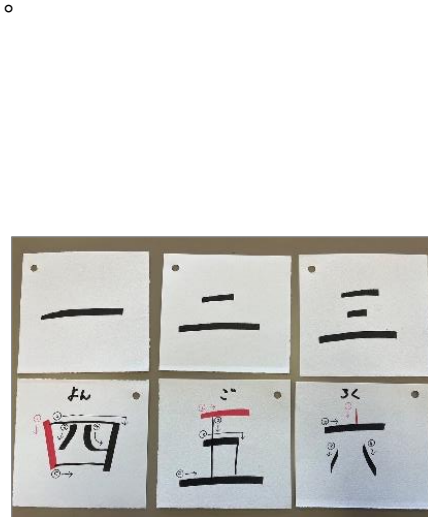
また、活動報告書を本プロジェクトのメンバーや対象児童(生徒)の通う学校と共有したことで、次回の支援に向けたスムーズな引き継ぎや準備を行うことが出来た点があげられる。



【ひらがな練習教材】



【紛らわしいひらがな練習プリント】



【数字の練習カード】

### 【総括と反省・今後の課題】

アフガニスタンから来た生徒に対して、前期は大学構内での日本語支援を行い、後期は2名がF中学校に通い始めたため、新たな環境に早く馴染めるように入り込み支援を行った。前期と後期を通して、中学校の支援では、本プロジェクトのメンバーの教育大生だけではなく、JTSやHIF合わせて20名以上が携わっているため、2人の支援を効果的かつ円滑に進めるには、支援者同士そして学校側との連携や意見交換が不可欠であることが分かった。また、在籍学校から支援者へ、そして支援者から学校への要望などもより活発に行うことが必要であると考えられる。

M小学校における支援では、前期と後期とも活動報告書を共有することで、次の支援へと円滑につなげることができた。支援者が対象児童のそばにいる時間が長いと、本人の精神的負荷になるだけでなく、クラスの日本人生徒もコミュニケーションやサポートの面で支援者を頼るようになってしまったため、教室を巡回したり教室後方から様子を見守るようにしたりした。

前期は算数と社会の入り込み支援を行っていたが、算数は得意教科であるため後期からは社会のみの支援を行った。社会などの専門用語の多い教科は、補助が必要であると感じる場面が多くなってきているため、教材や支援方法の工夫をすることが求められる。

今後の課題としては、各小学校・中学校の支援者の様子を観察・共有し、次の支援に活かすことも重要である。さらに、児童(生徒)本人と保護者のニーズを聞き取り、今後の支援の方向性を決める必要がある。特に教材づくりにおいて、対象児童(生徒)の学習進度や性格、目的に適した教材を作成していかななくてはならない。

### 【地域からの評価】

対面による支援や教材づくりを通して、連携機関の支援員の方からお褒めの言葉をいただいた。

「担当の先生のご指導の下、対象児童に対してモチベーションアップさせるため、興味をもたせるため、動画やリライト教材を作成したりして取り組んでいらっしゃる、いつも感心しております。十分に本人の助けになっていることでしょう」

### 【年間スケジュール】

4月～	日本語クラスのサポート (教育大call教室にて)
5月	入り込み支援 (H小学校、M小学校にて)
7月	動画教材作成
8月	中間発表会
10月～	入り込み支援 (H小学校、M小学校、F中学校にて)
11月	自作教材作成
12月	取り出しおよび入り込み支援 (K小学校にて)
1月	成果発表会
2月	成果報告書作成



Project	地域協働専攻 国際協働グループ
	08 哲学カフェ@はこだて

メンバー	[学 生] 前田 健太 / 木村 友香 / 井上 ゆいか / 小柴 杏奈 / 小林 大雅 / 後藤 あやめ / 瀧沢 愛 / 中田 寛人
	[担当教員] 菅沼 聡

**【背景】**

現在、函館において、サイエンスカフェなどと違い、哲学カフェが定期的で開催されているとは言い難い現状にある。そこで本プロジェクトで、哲学カフェを定期的で開催することによって改善しようと考えた。

**【目的】**

活動を通して、学生たちからの様々な意見を聞き視野を広げたり、大人の知識や経験を学び知見を増やしたり、新たな発見をする能力を身に着ける。

**【概要】**

事前準備では、哲学カフェを開催するにあたって、場所の確保やスムーズに進行できるように模擬練習を行い、実際に本番でやってみてよかったこと、改善点を出し、次実施するときに活かすことをし、計3回開催した。

**【プロセスと成果】**

前期はまず、メンバー全員が「哲学カフェとは何か」という本質を理解するところから始めた。過去の哲学カフェの実施例を参考に、それぞれが興味を持った哲学的テーマをいくつか持ちより、実際にメンバーでそのテーマについて話し合いを繰り返しながら、本番にふさわしいテーマを決めた。同時進行で、ポスター作り、開催日時と開催場所の検討など本番に向けての準備に取り掛かった。

本番は、コロナ渦であるため開催にあたって不安な点がいくつかあったが、感染防止対策を講じ、「シエスタハコダテ・Gスクエア」で前期7月22日、後期12月8日ともに無事に開催することができた。また今年度は新たな取り組みとして、10月5日の学校祭でも哲学カフェを開催し、計3回の開催を成し遂げた。主なテーマは、「男女の友情は成立するか」、「ジェンダー問題について」などであり、各テーブルで好きなテーマを選択し、1テーマ約10分程度の話し合いを行った。

成果としては、前期は集客が非常に困難であったことを踏まえ、後期は函館新聞に取材を依頼し、大きな宣伝効果が得られたこともあって参加者が増加した。学校祭では、友人や先生方に参加していただき、大いに盛り上がった。またアンケート結果では、満足度が非常に高く、ほぼすべての参加者が次回の参加にも前向きであることが分かった。



【メニュー作成の様子】



【実際の開催の様子】

### 【総括と反省・今後の課題】

「哲学カフェ」とは何かを考えるとところから始まったこの地域プロジェクトは前期に1回の開催、後期には初の試みとなる学期中2回の開催を通して、自分たちの「哲学カフェ」を構築していった。哲学カフェに使用するテーマ案を決める際には自分たちでも一つ一つそのテーマについて話し合い、その結果を見て採用していたのだが、何度も繰り返し話し合う中で、自分たちも哲学についての理解が深まったり、対話力向上にもつながったりした。また開催についても初めは効率よく席替えを行えなかったり、ファシリテーター役として参加していたメンバーも戸惑いがあったりと、中々うまくいかない部分があった。しかし、お客さんの声を聞きながら反省をし、改善を施すことで第3回目の開催では幅広い客層と、多数のお客さんに足を運んでもらい、たくさんのお褒めの言葉をいただけたので、確かな成果を感じる事ができた。

今後の課題としては、初めから最大の課題であった集客である。はじめはインスタグラムを使い学内の人へ、ポスターを使うことで高校生、地域住民へのアプローチを行っていたが成果は全く出なかった。2回目は学校祭であるため例外とし、3回目の開催前には函館新聞に掲載してもらい(報道の記録・P91に記事掲載)、それを見て数人が足を運んでくれたが、知り合いの誘いで来たという声や自分たちの友達が来ていたため、プロジェクト内集客の取り組みとしての成果は薄かったように感じた。そのため今後、この哲学カフェを引き継いでいく後輩たちには、より試行錯誤し、たくさんの方が来るよう取り組んでほしい。

### 【地域からの評価】

本プロジェクトである哲学カフェを通して地域の方々に様々な年代の方々が自分たちの提供したお題に対して自分の意見を交え、「違った観点からの意見を聞くことができ、とても魅力的だったし、楽しく濃密な時間を過ごすことができた」と言ってもらえた。

全3回開催したうち、少なくとも20名、多い場合は30名も来ていただき、「行っている活動自体はとても興味深くもっと早く知りたかった」とも言ってもらえた。SNSや新聞などの広告手段を活用して、早い段階から情報を世間に広げていくことが必要だし、その手段についても模索していかなければいけない。

10分間の哲学カフェを、それぞれ2時間開催したが話したりなく「もっと多くの方と色々なお題について語りたかった」という意見があった。

また、通年なら開催回数が2回だったが今回3回と増やしたものの、それでも開催頻度が少なく「もっとたくさん開催してもよいのではないのか」という意見もあった。

### 【年間スケジュール】

#### ■前期

- ・4月～6月  
テーマ設定、シミュレーション
- ・6月～7月  
集客、メニュー・アンケートの作成、  
1回目哲学カフェ開催

#### ■後期

- ・10月  
学校祭準備(メニュー改訂、ポスター)
- ・11月  
学校祭2回目哲学カフェ開催、学校祭の反省、  
ファイナル哲学カフェの準備
- ・12月  
ラスト哲学カフェの開催、反省
- ・1月  
地域プロジェクト成果発表会の準備  
(原稿作成、パワーポイントの資料制作)





Project	地域協働専攻 国際協働グループ
09	サブカルチャーがもたらす地域貢献

メンバー	[学 生] 石川 葵羽 / 佐藤 愛音 / 佐藤 瀬名 / 瀧川 玲菜 / 直井 梨紗 / 花澤 里菜 / 盛田 めぐみ
	[担当教員] 菅原 健太

### 【背景】

サブカルチャーは、メインカルチャーと対比される文化であり、一部の集団を担い手とする文化でありながら、数年の間で現代社会に溶け込んでいる。また、サブカルチャーに関わりを持つ地域貢献が行われている。本プロジェクトでは、人々がサブカルチャーにどのような視点から地域貢献を含む社会的価値を見出しているのかについて明らかにすることを目指した。

### 【目的】

本プロジェクトの目的は、サブカルチャーとは何かについて地域貢献の要素も含めて明らかにすることであった。また、資料の収集・分析から得られた知見をもとに、函館のサブカルチャーの実態について調査し、サブカルチャーに社会的価値が付与されるプロセスを明確にすることであった。

### 【概要】

本プロジェクトでは、現代日本におけるサブカルチャーについての情報を収集し、「生み出した人々のビジョン」、「集まる人々のビジョン」、「人々のキャラクター」、「人々の美德」、「サブカルチャーの社会的価値」、「社会にもたらす貢献」の項目に沿って分類し、メインカルチャーや伝統文化などと比較した。その結果、サブカルチャーの特徴として、①自由度、②SNS映え、③流行性、④親しみやすさの項目が浮上した。これらの要素を含む施設・お店でフィールドワークを行った。本活動を通して、サブカルチャーの社会的価値が見えてきた。

### 【プロセスと成果】

前期では、サブカルチャーの特徴を探るために、インターネットでサブカルチャーの事例を出来る限り数多く抽出した。そして、具体的に調べたサブカルチャーを「グラウンデッドセオリー」の質的分析法(戈木, 2005)に沿ってコード化・分類した。分類したカテゴリーをもとに、プロパティの抽出と比較を行った。この分析により、サブカルチャーとは、伝統文化やメインカルチャーとは異なり、日常的な自分たちの価値の創造であることや、その価値を共有することで満たされるものであることが分かった。また、それを誰もがSNSで発信することができ、発信者になることができるものであった。さらに、他の文化と比べて自由度の高い文化であり、多くの人から親しまれていることも分かった。サブカルチャーに社会的価値が付与された理由については、①世俗を忘れ、熱中できるものであるため、②娯楽として癒しを与えてくれるものであるため、③それを必要とするファンが魅力を伝播したものであるため、④経済効果を生むためであると仮説を立てた。

後期では、上記の仮説を検証するために、サブカルチャーに関わる情報を得るためのフィールドワークを函館市で実施した。ミニシアター、カフェ、雑貨店、オーガニック専門店、ロシア料理店など様々なジャンルの施設・お店で行った。それぞれの場所で得たインタビューや観察データの分析から、サブカルチャーが地域貢献に繋がっている実態が得られた。さらに、本プロジェクトでは、フィールドワーク先で実際に感じたことをブログサイトである“note”で発信した。記述で魅力を伝え、サブカルチャーの発信者となることができた。



【まるたま小屋】



【シネマアイリス】

### 【総括と反省・今後の課題】

プロジェクトでは、前期にはインターネットから収集したサブカルチャーに関する情報をもとに、プロジェクトの目的を明確にすることができた。目的に沿って、収集したデータのカテゴリー化を実施し、サブカルチャーの特徴について理解を深めることが出来た。サブカルチャーの特徴とは、日常的な自分達の価値の創造であり、誰もが発信できるものであった。また、サブカルチャーへの関与から、SNS上の発信者となることができ、価値の創造を経験していることであった。これらの特徴にもとづき、サブカルチャーと関わりのある地域の施設・お店でフィールドワークを実施し、社会的価値が付与される要素を抽出する必要性が浮上した。

上記の課題を踏まえ、後期には、サブカルチャーと関連付くフィールドワーク先を選定し、インタビュー項目の作成を経て、フィールドワークを実施した。その結果、サブカルチャーに社会的価値が付与される要素として、①自由度の高さ、②唯一無二のこだわり、③価値の創造、④共有の欲求、⑤経済的な需要、⑥情報共有が容易な世の中に適していること、⑦独自性の追求が可能であることを見つけ出すことができた。さらに、これらの要素は、「本質的な価値」と「社会的背景に基づく価値」に分類することもできた。これらの知見は、「サブカルチャーがもたらす地域貢献」を支えており、サブカルチャーの存在を意義付けるものである。なお、フィールドワーク先で得た一部の情報に関しては、noteでのブログ発信もしている。

本プロジェクトの限界として、フィールドワークが函館市内に限られたことにある。他の地域へもフィールドワーク先の対象とし、データの比較を加えると、サブカルチャーと地域貢献の関係性について理解をより深めることができた可能性がある。例えば、サブカルチャーには、SNSが普及し、情報共有が容易になった背景から、マイノリティを許容しようとする社会の変容が関与していた面である。

今後の課題として、多くの人々に親しまれるために必要な取り組みや社会的価値が付与される経緯・プロセスをさらに明確にする必要がある。その中で、サブカルチャーがもたらす社会貢献についてさらに明らかにしていくことが求められる。

### 【地域からの評価】

フィールドワークを通して、本プロジェクトに協力頂いた方々の間で、自分たちがサブカルチャーに関わっているかどうかの認識に関して、違いがあることを確認した。協力者によっては、サブカルチャーについて、初めて知る機会になったという意見も得られた。

また、フィールドワーク先の協力者の方々と親睦を深めるにつれ、「一生懸命プロジェクトに取り組んでいる気持ちが伝わったので是非自分のお店を発信してほしいと思った」という言葉も頂いた。

実際に、ブログ“note”を用いてフィールドワーク先の一部の情報を発信したところ、一定数の反応を頂き、SNSのコミュニティにおいても、私たちのプロジェクトの成果を共有できた。

### 【謝辞】

本プロジェクトにおいて、インタビューの機会を頂いた協力者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 参考文献

・ 戈木クレイグヒル 滋子 (2005). 「質的研究法ゼミナール: グラウンテッドセオリーアプローチを学ぶ」. 医学書院.

### 【年間スケジュール】

前期	4月15日	オリエンテーション
	5月9日	情報収集
	5月23日	↓
	5月30日	↓
	6月6日	収集した情報の分析・体系化
	6月13日	プロパティの抽出・比較
	6月27日	↓
	7月4日	発表準備・まとめ
	7月11日	↓
7月25日	↓	
後期	10月6日	前期の振り返り
	10月12日	フィールドワークに向けた
	10月26日	事前学習
	11月2日	フィールドワーク先の選定
	11月9日	インタビュー内容作成
	11月16日	フィールドワーク
	11月30日	↓
	12月7日	インタビュー・観察データの分析
	12月14日	↓
	12月21日	ブログ“note”の作成
	1月11日	フィールドワーク先の情報共有
1月18日	プロジェクト全体の振り返り	
1月25日	成果発表準備	



Project	地域協働専攻 国際協働グループ
	10 「やさしい日本語」活用プロジェクト

メンバー	[学 生] 田崎 倫夏 / 鈴木 飛雄馬 / 福田 雪乃 / 多賀谷 凌 / 嶋田 丞 / 徳光 理幸 / 平野 真衣 / 工藤 李々花
	[担当教員] 高橋 圭介

**【背景】**

昨今、震災や急激な気候変動による災害などが多発しており、将来、南海トラフ巨大地震や北海道・東北でM9クラスの巨大地震が起こると言われている。また、訪日外国人が大阪関西万博により増加することが見込まれることから、「やさしい日本語」を用いた被災時や平素の防災支援が求められている。

**【目的】**

1. 非常用食品の作り方や成分を調べ、在日外国人など様々な背景をもつ、全ての人に向けた非常用食品の作り方を紹介する映像を作成する。
2. 日本語が少しできる外国人や高齢者、子どもたちが函館の歴史や文化に触れられるよう観光案内板を「やさしい日本語」を用いて書き換える。

**【概要】**

1. 「やさしい日本語」についての理解を深め、市で蓄えている非常食の作り方などを「やさしい日本語」を用いて紹介する映像を作成する。
2. 函館市内にある観光案内板を「やさしい日本語」を用いて書き換える。

**【プロセスと成果】**

- 5月 6日 満間さん(函館校)のワークショップによる「やさしい日本語」の理解 やさしい日本語の書き換えについて文献を読んで学習 実際に書き換えの練習を行う (図1)
- 6月 非常用食品の作り方を「やさしい日本語」へ書き換える話し合い
- 7月 奥野先生によるサイト紹介(15日) 非常用食品映像の作成 (図2)
- 9月25日 函館市地域交流センターで開かれた函館防災マルシェにて映像、ポスターを展示 (図3)
- 10月 「南北海道の文化財」サイトの観光案内板書き換え
- 10月以降 「南北海道の文化財」サイトの観光案内板書き換え (図4) 伊藤地プロ(本書P10) と連携し、書き換えとすり合わせを繰り返し推敲
- 1月19日 伊藤地プロと合同で、はこだて未来大の田島さんによる書き換え 「南北海道の文化財」サイトの説明会



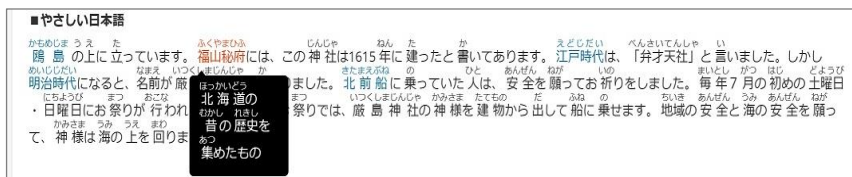
【図1 書き換えの様子】



【図2 非常用食品映像の作成】



【図3 防災マルシェでの展示の様子】



【図4 「南北海道の文化財」サイト書き換え】

**【総括と反省・今後の課題】**

ワークショップや文献、論文を読み、「やさしい日本語」の理解を深めることが出来た。また動画の作成では、「自動読み上げの音声で良いのか」や動画の終わり方について課題が残された。観光案内板の書き換えでも使える語彙でつまづくことが多く、特にカタカナの単語の扱いに困った。一方で、今回のプロジェクトで書き換えることにしたものは全て書き換えが終わり、「南北海道の文化財」サイトへ入力して終えることが出来



た。また、書き換え作業を忘れてくる人がおらず、解決に時間のかかるような課題もすぐに全体で共有することができていて、全体としては非常にスムーズに進めることが出来た。尚、作成した動画は函館市役所に提出し、採用されて実際に使ってもらえる可能性がある。

「やさしい日本語」のレベルである旧日本語能力試験3級までの語彙では書き換え、言い換えがうまくいかないことが多く、全体的に時間がかかってしまっていた。また、観光案内板のタイトルにカタカナが使われている場合はそこも書き換えるのかどうか、俳句を書き換えるのかどうかなど、書き換えや注釈を入れる以外のところでもつまづくことが多かった。

今後の課題として、実際に書き換えをおこなってみて、「使える語彙が少なく、簡単な単語に置き換えるのが難しかった」「自分たちが思うやさしい日本語と理想とされるやさしい日本語にギャップがあり、大変だと感じた」などの意見が挙げられたので、自分たち自身ももっと勉強して知る必要があると感じた。また、観光案内板の書き換えにおける具体的な課題としては、宗教に関する語や戦争に関する語などを定めた書き換え基準に従って書き換えることが難しく、注釈をつけるという代替案で対応し、俳句や漢詩の扱いについても課題が残った。

### 【地域からの評価】

防災マルシェにおいては、「動画の終わり方を工夫した方がよい」「動画内の文字の字体を見やすく変えた方がよい」など非常用食品映像に関して様々な指摘をいただいた。文字の字体については、特定のフォントに対して抵抗感がある人もいたため、ユニバーサルデザインのフォントを用いてはどうかというアドバイスを頂いた他、アレルギー表記をより分かりやすくするためにピクトグラムを採用するのがよいのではないかという声があった。アドバイスを活かしピクトグラムを用いて映像を作成したところ、図を使用するという工夫によって、誰が見てもすぐに理解しやすい情報へと改善された。

他にも表記方法に関しての指摘があった。映像の中で「アレルギーのある人は気をつけてください」という表現を用いた部分があった。これに対し、表現方法が具体的ではなく、実際にどう行動したらよいか迷ってしまうのではないかという疑問から「係の人に伝えてください」「聞いてください」のような明確な表現に変えたほうがよいのではないかという声も頂いた。このアドバイスを受け、「アレルギーがある人は食べないでください」という明確で直接的な表現に変更した。他の部分に関しても分かりやすく簡潔な表現方法を用いることができた。

評価されたのは、映像の前半部分において動きがあって分かりやすいという点である。この評価を受け、動画後半の静止画だった部分を、動きのある動画に実際に変更し直した。

ご協力いただきました函館市役所の鶴岡崇男さま、はこだて未来大学の奥野拓先生、北海道教育大学函館校の満間笑歩さん、はこだて未来大学の田島鼓太郎さん、発表を聞いてくださった方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 【年間スケジュール】

#### ■前期

- 4月15日 第1回「ミーティング」
- 4月22日 第2回「文献講読①」
- 5月6日 第3回「満間さんのワークショップに参加」
- 5月13日 第4回「文献講読②」
- 5月20日 第5回「文献講読③」
- 5月27日 第6回「文献講読④」
- 6月10日 第7回「文献講読⑤」
- 6月17日 第8回「動画作成について」
- 6月24日 第9回「動画作成の話し合いなど」
- 7月1日 第10回「非常食書き換えの話し合い」
- 7月8日 第11回「話し合いつづき、役割分担など」
- 7月15日 第12回「奥野先生によるサイト紹介」
- 7月22日 第13回「発表準備、動画の作成など」
- 7月29日 第14回「発表準備等」
- 7月31日 「中間発表会」
- 9月25日 「函館防災マルシェに参加」

#### ■後期

- 10月20日 第1回「マルシェの反省」
- 10月27日 第2回「動画の改善、観光案内板着手」
- 11月3日 第3回「観光案内板書き換え1回目」
- 11月10日 第4回「 " " 」
- 11月17日 第5回「伊藤地プロ合同書き換え基準話し合い」
- 11月24日 第6回「観光案内板書き換え2回目」
- 12月1日 第7回「 " " 」
- 12月8日 第8回「観光案内板書き換え3回目」
- 12月15日 第9回「 " " 」
- 12月22日 第10回「伊藤地プロ合同書き換えなど」
- 1月12日 第11回「伊藤地プロ合同書き換え基準発表」
- 1月19日 第12回「田島さんによる書き換えサイトの説明」
- 1月26日 第13回「伊藤地プロ合同基準照らし合わせ」
- 1月28日 「成果発表会」
- 2月2日 第14回「まとめ」





Project	地域協働専攻 国際協働グループ
11	函館からSustainable Developmentについて考える

メンバー	[学 生] 森山 光南 / 中村 桃子 / 丹野 友愛 / 星井 望佑 / 柴田 陸乃 [担当教員] 西宮 宣昭 / 高橋 修
------	--

**【背景】**

日本では身近になりつつあるSDGsではあるが、国内の取り組み状況について十分把握されていない。特に本地域プロジェクトの受講生においても、函館地区や地域プロジェクトの受講生の出身地についてSDGsの活動事例を十分把握していない。来日中の外国人のSDGsに対する認識も十分に把握できていない。

**【目的】**

活動を通して、SDGsに関する取り組みについて学び、一人一人に何が出来るかを考える。

**【概要】**

外部団体(HIF:北海道国際交流center)のプログラムに参加し、また本学函館校への留学生との交流を通してSDGsの現状と課題を学ぶ。函館地区のSDGsの取り組み状況や受講生の出身地のSDGsの取り組みについても把握し、交流会で発表する。

**【プロセスと成果】**

前期はHIF(北海道国際交流センター)の子ども食堂やJJプログラムに参加した。プログラムの一部であるJJプログラム(アメリカ在住の日本語が一定程度理解可能な学生との交流)では、外国人にわかりやすい日本語の使用について、課題となることを認識し、また実際にどのように子ども食堂が運営されているか把握した。後期は授業の関係で子ども食堂への参加はできなかった。

① 蔦屋書店SDGsマルシェのイベントレポート作成

9月17日(土)・18日(日)に函館蔦屋書店にてHIF主催で行われた「SDGsマルシェvol.4」に参加した。本来であれば運営支援として関わる予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大による規模縮小のため、訪問しレポートを作成するのみにとどまった。函館地区においても、さまざまな団体がSDGs関連の活動を行っていることが分かった。

② 留学生とSDGsの取り組みについて発表

地域プロジェクトのメンバー及び留学生2人と自分の出身地や函館のSDGsの取り組みについて発表し合った。地域ごとのSDGsの取り組み方の違いや、文化について留学生と話し交流した。

～発表内容～

- ・ファストファッション
- ・函館市のSDGsの取り組み
- ・秋田県由利本荘市のSDGsの取り組み
- ・ニセコ町のSDGsの取り組み
- ・東京都のSDGsの取り組み

～その他～

- ・成人年齢について
- ・方言について
- ・日本の文化について



交流会の様子

### 【総括と反省・今後の課題】

前期はHIFと協力し、子ども食堂やJJプログラムを始めとする様々なイベントに参加することができた。  
後期は、留学生との交流を通して各国のSDGsの現状を知ることができた。

後期は、前期の活動時から実施を検討していた留学生との交流を行うことができたことが一番の成果であると認識している。留学生は、ベトナムからの留学生1名、オーストラリアからの留学生1名であり、両者とも一定の日本語能力を有していた。一方で、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、HIFと連携した活動が十分に出来なかったことが反省点としてあげられる。

活動を通して、一人一人の行動を少しずつ変えることで世界の現状を変えることができることや、SDGsの取り組みが未だ始まっていない国もあることが分かった。自分の専攻に結びつけることで、どのような形でSDGsに取り組んでいけばいいのかが考えやすく、行動にも移しやすいという意見も留学生との交流の中で出てきた。また、本やインターネットなどから情報をインプットし、情報共有をすることでSDGsについての学びを深められることも分かった。

今後のSDGsの課題として、日本だけでなく全ての国でSDGsについての理解を深める機会を増やすことがあげられる。SDGsは先進国、発展途上国、公的機関、民間すべてが協力して達成する目標であるため、まずは目標や行っている政策について学び、一人一人が出来ることを少しずつ実行していくことが求められる。

### 【地域からの評価】

HIFのプログラムに参加したため、HIFから意義ある参加であったとの評価を得た。なお、特定の地域での活動は行っていないため、地域からの評価はHIFからのもののみとなった。

### 【年間スケジュール】

#### ■前期

- 4月15日 第1回「ガイダンス」
- 5月12日 第2回「HIFとの打ち合わせ」
- 6月18日 第3回「HIF×函館空港 親子向け体験イベント  
わくわくワークショップ」
- 7月28日 第4回「前期振り返り」
- 9月17・18日 第5回「SDGsマルシェ」
- 5月～8月ごろまで毎週金曜日 「子ども食堂」

#### ■後期

- 10月 5日 第1回「後期打ち合わせ」
- 10月27日 第2回「打ち合わせ」
- 11月25日 第3回「打ち合わせ」
- 12月22日 第4回「留学生との交流会 1回目」
- 1月20日 第5回「留学生との交流会 2回目」
- 1月26日 「後期振り返り」
- 2月 2日 「まとめ」



Project	地域協働専攻 国際協働グループ
	<b>12 函館の国際交流活動の現状と課題</b>

メンバー	[学 生] 今井 康太 / 及川 穂乃花 / 上山 旺奨 / バゲンダ アビガイル / 平河内 絵理 / 宮田 明澄 / 松館 花 / 吉井 さつき
	[担当教員] 河 錬洙

**【背景】**

函館の国際交流の現状と課題として、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大による国内旅行者や外国人の動きが制限され、国際交流の場が減ってしまっていることを前提とした。これを踏まえ、はこだて国際民俗芸術祭のボランティアに参加するWMDFグループと、SNSを使った函館の情報発信を行うグループに分かれ、それぞれの観点からテーマに向き合うこととする。

**【目的】**

活動を通し、閉鎖的な環境下でも能動的な姿勢を崩さず、函館の国際交流に対する当事者性を身につける。

**【概要】**

- ① SNS班(今井/及川/平河内/宮田/松館): 複数のSNS媒体を用い、同世代の外国人を対象とした函館の魅力を発信する。コロナ禍後の来訪を見据え、彼らとの国際交流を生むきっかけをつくることを目的に、学生目線の函館の奥深さやおもしろさを意識しそのデータ分析を行った。
- ② WMDF班(上山/バゲンダ/吉井): 函館の元町公園で開催15回目を迎える「はこだて国際民俗芸術祭」(8月)のボランティアスタッフを活動の主軸とする。海外、国内を巻き込んだ文化芸術交流である本祭を「国際交流」と位置づけ、その現状と運営スタッフの抱える課題の解決を目指す。

**【プロセスと成果】**

- ① SNS班 (前期)全メンバーで予定を合わせ投稿  
(後期)各メンバーの興味関心に沿った投稿  
Instagram 20投稿(総いいね数128→606)  
TikTok 9投稿(総閲覧数860→6073)  
Twitter 12投稿(総閲覧数2869→4402)  
・日本語の表記に加え、外国語の表記を行う。  
・外国人にヒットするハッシュタグを中間発表以降に追加。

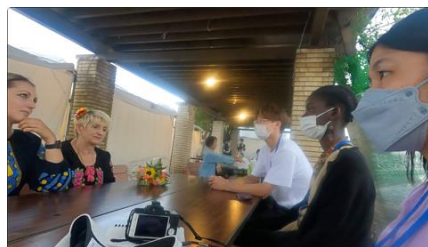


【①学生目線の投稿を意識】

- ② WMDF班

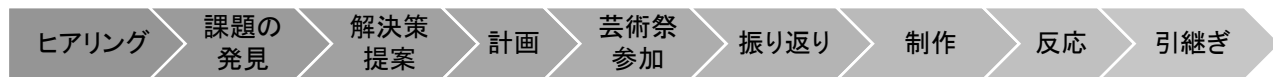


【②芸術祭運営スタッフと企画】



【②ウクライナの出演者の声を聞く】

前提	課題	活動	成果
コロナ禍で3年ぶりの開催	ボランティアスタッフが必要	運営との説明会を大学で開催	教育大生約10名がボランティアスタッフ新規登録!
国際交流の現状と課題のテーマ設定	WMDFの現状を知るには?	出演者24組に直接インタビュー	現状を記録:動画をWMDF公式Instagramで配信中
地域プロジェクトは毎年継続される活動である	前年度までの積み重ねが見えない	活動報告を4分程度の動画にまとめる	後輩への発信:オープンキャンパス特設サイトに掲載予定





**【総括と反省・今後の課題】**

次年度の活動提案▶▶「WMDF」の歴史・活動を「体験」し「記録」し「発信」し「反応」し「やりとり」する

	WMDF	改善	SNS
強み	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ボランティアスタッフという体験からテーマに向き合える</li> <li>● 函館の地域団体と継続的に関わりつながりが確保されている</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● TikTok, Instagram, Twitterなど発信源を個人単位で分担できるため、活動の自由度が高い</li> <li>● データ分析によって地域への影響を客観的に把握できる</li> </ul>
不足点	<ul style="list-style-type: none"> <li>● さまざまな形で帰着できる経験を決めるのが難しい</li> <li>● 8月のみの現場活動のため、計画的に経験を更新しづらい</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 扱う主題が曖昧で、個人の好みに偏りすぎるとテーマに対する取り組みの一貫性がなくなってしまう</li> </ul>

▶浮かび上がった課題

両班の活動が共通して「発信」に留まっており、それは両班の活動を共有せず無駄が多かったことが指摘できる。WMDF班に関しては、ボランティアスタッフの体験の活用法を絞り切ることができず、発信する情報のコンセプトに一貫性を持つことができなかつた。SNS発信班は、「函館」という大きなテーマだったため、トピックや発信源によって扱い方が異なり、個人にかかる選択権が大き過ぎたという評価があつた。このことから、互いの班で進捗状況を交換しながら、強みを活かしあえる関係性を構築できなかったことを課題とする。その原因の一つとして、プロジェクト開始時点での積み重ね（昨年度までの活動の記録や成果などの情報）が少なく、互いが協力体制まで結びつくのに時間がかかってしまったことが意見として挙がった。

▶そこから考えられる改善策

- ① 来年度の地域プロジェクトの特性に沿った提案と、昨年度の活動を4月に共有する。
- ② 毎年8月に行われる「はこだて国際民俗芸術祭」のボランティアスタッフに、できる限りメンバー全員が参加し、共通した体験をもつことを強く勧める。
- ③ ①・②にメンバーが前向きに取り組むため、本地域プロジェクトに適切な学生が参加できるよう、次年度の地域プロジェクト選考段階での情報提供に力を入れる。

**【地域からの評価】**

地域プロジェクトの皆さんにはボランティアスタッフ募集説明会の準備に加え、当日のスタッフとして活躍してもらいました。特に今回は3日間という限られた時間内でアーティストへのインタビューという運営にとっても大切な仕事してもらい、運営側の想いを伝えた上で質問等も考えてもらいました。次々くるハプニングにも自分達で対応するなど頼もしい限りでした。とても行動的で責任感のあるチームだったと思います。

エネルギー溢れる地域プロジェクトメンバーに、この場をお借りして感謝申し上げます。  
(はこだて国際民俗芸術祭運営スタッフ 柴田様)

**【その他】**

もっと私たちの活動を知りたい方へ▶▶

1. Instagram: 日々の記録  
「hayonsu.chipro\_15」



2. 「WMDF(はこだて国際民俗芸術祭)」でウェブ検索  
…昨年度の芸術祭のようすや、ボランティアスタッフの募集情報を知ることができます。さらに、公式Instagramの投稿には、メンバーによる写真と文章の投稿も多数あります。





Project	地域協働専攻 国際協働グループ
13	函館と演劇文化
メンバー	曾我部 雄基 / 柁瀬 仁那 / 須藤 謙太 / 岡部 壮汰 / [学 生] 井上 翔太 / 金田 莉奈 / 鉾建 峻河 / 立花 怜生 / 中川 翔太 / 田中 良輝 / 竹内 瑠菜 [担当教員] 星野 立子

**【背景】**

函館における地域と演劇の関わりについて、地域に根ざした演劇文化があるにもかかわらず主に若い世代の演劇への関心が薄いという問題がある。そこで函館と演劇文化の現状を調査し改善しようと考えた。

**【目的】**

- ・活動を通して、地域と演劇の関係について知る。
- ・活動を通して、演劇という文化の意義や魅力について知る。
- ・活動を通して、演者としての知識を身につける。
- ・活動を通して、演劇についての発信を行う。

**【概要】**

函館に存在している演劇団体について調査を行うことで、函館と演劇の関係を探るとともに、コロナ禍における演劇の在り方を知る。演劇という文化の意義やその魅力について感じる。演劇から普段の生活に活かせることはないか考える。実際に演劇を体験してみることで、客席からではわからない工夫や技術を知る。一年間の活動の締めくくりとして、雑誌の刊行や地域の方々とのシンポジウムを行い、演劇について発信する。

**【プロセスと成果】**

前期は、『サンシャイン・ボーイズ』を観劇し、函館演劇鑑賞会事務局長・鈴木順子さんにお話を伺うことで、地域で受け継がれてきた演劇文化について知ることができた。また、演劇ユニット41×46主宰の館宗武さん、札幌の劇団イナダ組代表イナダさんにお話を伺い、お二方の演劇に対する思いや、芸術の中の「演劇」の特徴について知ることができた。その後、函館市に存在している演劇団体についての調査を行った。その結果団体によって目的や構成メンバーに多様性があることが分かった。

後期は、冊子『函館と演劇文化』の編集作業・刊行を行った。また、青森訪問・空間シアターアクセプ代表の田邊克彦さんからお話を伺い、実際に舞台に立ってみて演じてみることで、演者としての演劇を肌で感じることができた。演劇ユニット41×46特別公演『人間の証明 或る男の歌』を観劇し、メンバーで意見の交換を行った。その後、1年間の活動の締めくくりとして、雑誌の刊行や地域の方々とのシンポジウムを行い、演劇について発信した。当日は20代～60代の計11名の方々に参加していただき、たくさんの反響を頂くことができた。



館宗武さんからお話を伺う様子



田邊克彦さんとの交流の様子

### 【総括と反省・今後の課題】

前期は、概ね目的を達成することが出来た。

後期は、前期に学んだことを活かしながら、目的を達成することが出来た。また、前期の活動と比較して、メンバー全員での一体感が増し、協力して進めることができた。

活動を通して、議事録をとり、活動の振り返りをこまめにすることでプロジェクトをさらに効果的なものにすることができた。

今後の課題として、自発的・活発な質疑応答が挙げられる。

### 【地域からの評価】

以下、シンポジウムで得ることができた地域からの評価である。

- ・函館の演劇状況が少しわかりました。ありがとうございました。(60代)
- ・函館に、演劇が好きで演劇を伝承したいと思っている方々が集っていることに感動しました。劇に関わる者として、様々な立場の方々のお話が聞けて、よい経験となりました。ありがとうございました。(40代)
- ・演劇をされる方、鑑賞文化を支える方、それぞれの考えを聞くことができ、よかったです。お疲れ様でした。冊子も興味深いので、帰宅後、ゆっくり拝読したいと思います。(40代)
- ・自分は学生の演劇団体に所属していますが、「学生は学生の内輪で」みたいな意識を団員に感じることがあります。そんな中で外界の皆さんのお話を聴けたのはとても幸運でした。ありがとうございました。(20代)
- ・演劇を創っている方、観る場を提供する方、それぞれの立場から、演劇に対する想いをきくことができ、非常に貴重な機会を頂くことができました。私自身、演者をやってきましたが、表現者の方のお話をきいて勉強になりました。(20代)
- ・少し頭がこんがらがっているが、大変タメになった。(30代)
- ・普段聞くことのできないお話がたくさんあって、非常に楽しかったです。自分自身の創作にも役立てていきたいと思います。本日はありがとうございました。(20代)
- ・演劇鑑賞会に入会して、芝居の素晴らしさを人に伝えるむずかしさを感じていました。けれど、私が誘った方が感動して、又別の方に入会をすすめている事を知り、「感動」は伝わっていくのだと思いました。「目の前に生身の人間がいると脳が本気になる」まさに、生の舞台は、舞台と観客が一体になって作りあげていくところが最高です。本日はありがとうございました。(60代)
- ・演劇が好きで今日来てみました。刺激になった1日でした。ありがとうございました。(30代)

### 【年間スケジュール】

#### ■前期

- 4月15日(金)地域プロジェクト I 始動
- 4月26日(火)『サンシャイン・ボーイズ』観劇(函館芸術ホール)
- 5月13日(金)17:30から(函館演劇鑑賞会事務所)函館演劇鑑賞会事務局長・鈴木順子さんにお話を伺う。
- 5月18日(水)劇団イナダ組『slow dome』観劇(メンバー1名)
- 5月27日(金)演劇ユニット41×46主宰の館宗武さんにお話を伺う。
- 5月末～7月初め函館市内の劇団の調査。
- 6月10日(金)演劇理論書に関する課題の発表。
- 6月24日(金)札幌の劇団イナダ組代表イナダさんにお話を伺う。
- 7月10日(日) 16時～17時函館野外劇を観る。(メンバー3名)
- 7月12日(火)劇団四季『ロボット・イン・ザ・ガーデン』スタッフ手伝い(函館市民会館)(メンバー1名)
- 7月24日(日)15時～16時半 座談会
- 7月中旬～下旬 中間発表会に向けての準備
- 7月31日(日)中間発表会

#### ■後期

- 10/13(木)地域プロジェクト II 始動
- 10/20(木)冊子『函館と演劇文化』編集作業
- 10/26(水)劇団PaPの林絢さんと和野一稀さんとのワークショップ
- 11/11(金)冊子『函館と演劇文化』刊行
- 11/13(日)青森訪問・空間シアターアクセプト代表の田邊克彦さんのお話
- 11/17(木)青森訪問の振り返り
- 11/24(木)シンポジウム打ち合わせ開始
- 1/14(土)・1/15(日)演劇ユニット41×46特別公演『人間の証明 或る男の歌』観劇(11名)
- 1/19(木)シンポジウム最終打ち合わせ
- 1/21(土)シンポジウム開催
- 1/28(土)成果発表会



Project  14	地域協働専攻 国際協働グループ  <b>函館の民俗記録保存プロジェクト</b> <b>-函館のオシラサマを題材に-</b>
メンバー	[学 生] 鳴海 麗 / 下山 昂大 / 藤田 月夜 / 中居 美穂 / 駒木 希奏 [担当教員] 村田 敦郎
<p><b>【背景】</b> 東北地方で著名なオシラサマ信仰だが、実は道南地方にもこの習俗は伝わっている。過去に道南地域のオシラサマ信仰について言及している研究はいくつかあるが、体系的に調査されたのは1985年が最後であり、最新の調査を見ても2009年が最も新しく、オシラサマ信仰の現状は定かではない。オシラサマは、東北において民俗文化財として指定するほどの文化であるにも関わらず、現在の函館においては等閑視されている。そこで本プロジェクトでは函館におけるオシラサマ信仰の現状を調査することとした。</p> <p><b>【目的】</b> 函館に伝わる民俗文化であるオシラサマ信仰の歴史的展開と現状を記録する。また、将来的には津軽海峡文化圏における共通の文化要素、あるいは差異を明らかにするための基礎資料を作成したいと考えている。</p> <p><b>【概要】</b> 文献調査を通してオシラサマ信仰を理解し、道南のオシラサマ信仰の現状を把握した。フィールドワークでは文献から看取した情報をもとに関連する寺社を訪ね、宗教関係者とオシラサマ所有者にインタビュー調査を行った。</p>	
<p><b>【プロセスと成果】</b> 前期では文献調査とフィールドワークを行った。第一段階として文献調査を行い、オシラサマ信仰の現状を把握した。次にフィールドワークを行い、函館のオシラサマはどこに存在しているのかを調査した。その調査の結果から、函館のオシラサマが現存していることが明らかになり、持ち主にインタビュー調査をすることができた。毎月の月次祭に集う信者の中にオシラサマの祀り手がいるという情報を得たため、2022年7月10日に高宮大神にてフィールドワークを行った。神社を開いたのは先代のX氏(神霊を憑依を自らに憑依させお告げを行うセンセイ/カミサマと呼ばれる女性宗教者)で、現在はその娘のY氏が後を継いでいる。過去、高宮大神には10対ほどのオシラサマが連れてこられていたが、現在は1対のみとなっている。センセイのX氏が健在だったころは、信者とオシラサマを連れて神社仏閣を参詣し、修行をしていたという。参詣先ではオシラサマのおセンダク(着ている布)に御朱印が押され、修行によってオシラサマは「クライアゲ(位上げ)」をする。修行が終了して一人前の神様になることを「ミクライ(御位)に就く」という。5~60年ほど前にX氏が神様からのお告げを受けて、7対のオシラサマを授けられたとして、境内にあったクスノキでオシラサマを製作し、信者7人に祀らせた。そのうちの1対が月次祭に連れてこられていたA氏のものである。また、月次祭に参加していたD氏のもつオシラサマもこのとき授けられたものだが、既にミクライに就いており、D氏の自宅に安置されている。ほかの5対の現在は不明である。</p> <p>次に渋谷道夫『道南の民間信仰』で紹介された、カミサマと呼ばれるZ氏の調査のために岩木神社へと向かったが、Z氏はすでに死去しており、ご子息のE氏にお話を伺った。岩木神社は昭和59年に閉鎖され、現在はアパートに建て替えられており当時の面影はない。当時は自宅兼神社であり、主に不動明王、龍神、オシラサマを祀っていた。Z氏が「カミサマ」として占い、祈祷、オシラサマアソバセなどを行っていた。E氏の所有するオシラサマのおセンダクには数多くの御朱印が押されており、Z氏が頻繁にオシラサマを連れて修行していたことがわかる。金糸で作られた立派なオシラサマで、首にはそれぞれメダルを下げている。呼称は「オヒラサン」で、普段Z氏の長女が保管している。祭日は決まっておらず、毎朝水をお供えするなどの簡易的な形でお祀りしているがゆくゆくは供養する(手放す)ことを考えている(現在、村田研究室でお預かりしている)。</p> <p>後期では前期での文献調査やフィールドワークの成果をもとにアカデミックリンクに出展し、審査員特別賞を受賞した。また前期の調査で得た資料を見直し、整理をした。神職のK氏がオシラサマを所有しているという情報があつたため、お話を聞く機会をいただいた。K氏がオシラサマを祀ることになったきっかけは、昨年2022年の5月ごろに祀り上げ(神社の廃業や神棚の処分のこと)の依頼を受けたことである。依頼主の祖父が祀っていた「オーヒラサン」を祀り上げてほしいと言われ、一般の神棚だと思って訪ねたが、そこにあつたのは扉付</p>	



きの木箱に入ったオシラサマであった。2対目の小さいオシラサマを祀るきっかけは、「祀れなくなった」という人が函館八幡宮に直接持ち込んできたことだった。元々、訪問者の母が祀っていたものだが、オシラサマの由来もルーツも不明で、もう祀れないとのことだったため、預かることにしたそうだ。現在までは複数人の宗教関係者やオシラサマ所有者にお話を伺うことができた。引き続きオシラサマの所有者を探して、調査を行いたい。



K氏の所有するオシラサマ



村田研究室のオシラサマ

### 【総括と反省・今後の課題】

フィールドワークを通して、函館のオシラサマ信仰が衰退しつつあることが明白になった。推定される原因として、まず女性宗教者(カミサマ/センセイ)の存在がほとんどみられなくなったことがある。また、オシラサマの継承者が少なくなっていることで、オシラサマの祀り方や伝統などが失われつつあるためだと考えられる。高宮大神ではセンセイが健在だったころはオシラサマアソバセを行っていたものの、伝承者がいないことや引き継いだ人もやり方がわからないという理由から、簡易的なものとなっている。またオシラサマを祀る神社が廃業するなどもあり、オシラサマ文化全体が廃れつつあるといえるだろう。大湯卓二によると「オシラサマは望むものの意志によって祭祀が可能というのではなく、オシラサマから選ばれた特定の人、オシラサマと宗教的邂逅が伴わなければ祀ることはできない」としている(「津軽地方における「授かるオシラサマ」の土壌信仰」『青森県の民俗』2008:p11)。オシラサマのような「授かりカミ」の習俗は津軽の信仰土壌の中で伝統的に継承され、その霊的能力はイタコやカミサマによって保持され実践されてきたと考えられるが、現在は女性宗教者そのものの数が減少していることから、新しいオシラサマが誕生するのはもちろんのこと、オシラサマの存続が難しいものであることが明らかとなった。

本プロジェクトにおいては今後の展望として、オシラサマという宗教文化の維持および文化財保存への提言を行う予定である。我々はこれまでの調査を踏まえて、オシラサマに対して民俗文化としての文化的価値を見出していくことを課題に挙げていた。このことに関して、オシラサマ信仰の価値づけの是非についても再考していきたい。さらに文化が衰退していることに変わりはないが、その文化を引き継ぐことの意味合いを考え直す必要があるとも考えている。オシラサマがパーソナルなカミサマ・現代のカミサマとして変容していくという可能性もある。時代に即してカミサマの在り方も多様に変容していることから、現代に「生きる」オシラサマの存在意義を引き続き考察していきたい。

### 【地域からの評価】

- ・オシラサマ信仰について函館市教育委員会生涯学習部文化財課に問い合わせをした際、本プロジェクトの調査資料や報告が文化財保存の発見や保存に寄与することを期待しているとのことであった。
- ・オシラサマに関わる宗教関係者や所有者の方々からも、その成果が期待されている。
- ・キャンパスコンソーシアム函館の企画である「HAKODATEアカデミックリンク」において、審査員特別賞の評価をいただいた。

### 【年間スケジュール】

- 4月 村田先生によるオシラサマについての授業
- 5月 文献調査:函館におけるオシラサマ信仰の把握
- 6月 フィールドワークの予備調査
- 7月 インタビュー調査、資料の整理  
地域プロジェクト中間発表
- 10~11月 HAKODATEアカデミックリンク 出展  
※審査員特別賞 受賞
- 12月 調査資料のまとめ
- 1月 地域プロジェクト 成果発表

